

2) マツムシソウ＝松虫草

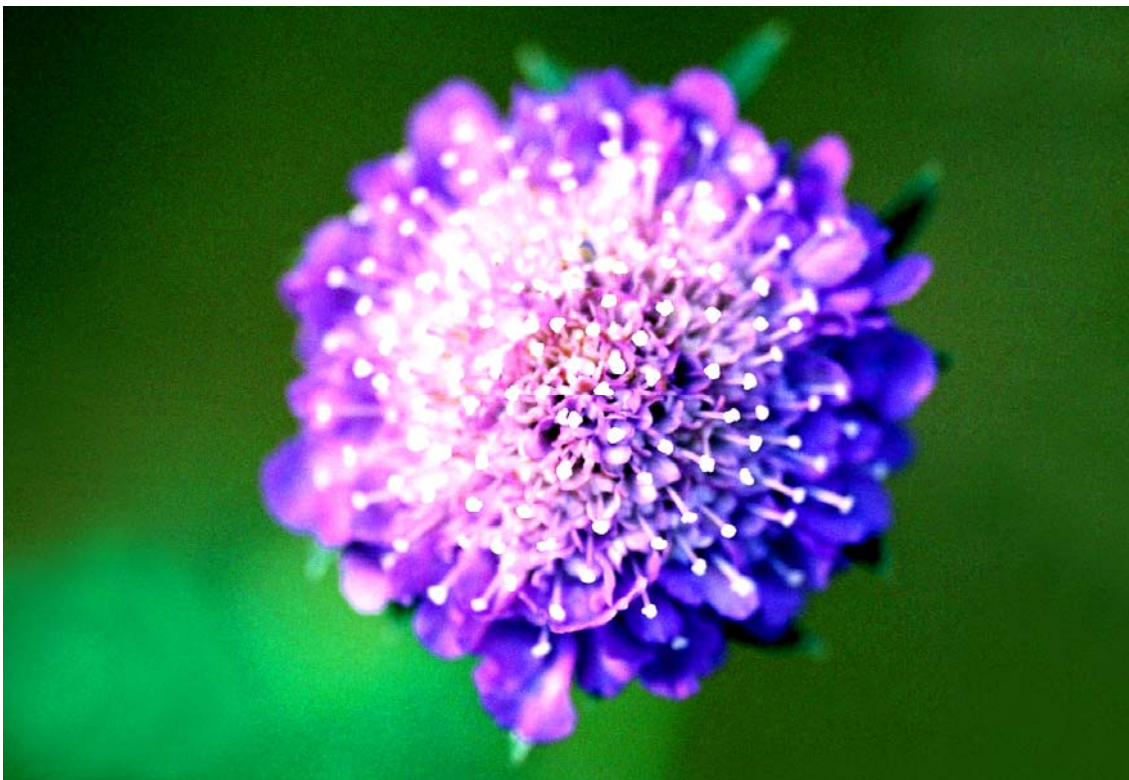
マツムシソウ科の越年草である。北海道から九州まで、各地の草原地帯に生え、関東周辺では標高1,000m ぐらいの高原地帯に、よく群落を作っているのを見かける。マツムシソウ属は世界では約70種が知られ、日本にはこのうちの1種が分布する。またマツムシソウ科の植物は、地中海の沿岸から西アジアを中心に世界に約270種が知られ、日本にはマツムシソウ属のほかにナベナ属がある。この仲間はキク科に極めて近い種で、茎は高さ50～80cmほどになり、葉は対生し羽状となる。8～10月長い花柄の先に、径4～6cmの淡紫色の頭上花をつけて上向きに開く。花冠には二つの形があり、中心部の小花は筒状で等しく4裂し、周辺部の小花は唇形状となり5裂する。和名の起こりは松虫の鳴く頃に花が咲くからとか、花の形が仏具の『松虫鉦』に似ているからともいう。別称として輪鋒菊(リンポウギク)とかノダイコン、シバギク、ミヤマなどともいう。学名は『*Scabiosa japonica*』で、属名は瘡蓋(カサブタ)のあるとか、ザラザラしたという意味で、かつては疥癬などの皮膚病の薬として用いられていたからだという。しかしこれはまた花の中心にある小花の集合したものを、瘡蓋に見立てたものかも知れない。イギリスでも『Japanese scabia』とか、『moaning bride』(悲しめる花嫁)と呼んでおり、その由来はイギリスでは紫の花色は、悲しみの色とされているためであろう。また中国では『山蘿蔔』(サンラフク)と呼んでいる。「蘿」はツタなどの蔓性植物やキク科の草本のことを意味しており、「蘿蔔」はダイコンとかスズシロのことを指している。これは葉の形状が大根に似ているため、日本のノダイコンという別称も同じ理由なのだろう。

ヨーロッパに伝わる伝説によれば、アルプスの『妖精フィチャ』は、薬草で若い羊飼いの病気を治してやり、やがて彼に恋をするようになる。しかし彼には許嫁があることを知って悲しみ、そのために死んでしまう。哀れんだ神『エスキュラ』が彼女のことを美しいマツムシソウの花に変えたのだという。この話はマツムシソウが疥癬の治療薬として利用されていたことを物語るものであろう。またヨーロッパではこの花を『貴婦人のピンクッション』と呼ぶ地方があり、確かに蕾も花も咲き殻までが、ピンクッションというのにふさわしい形をしている。

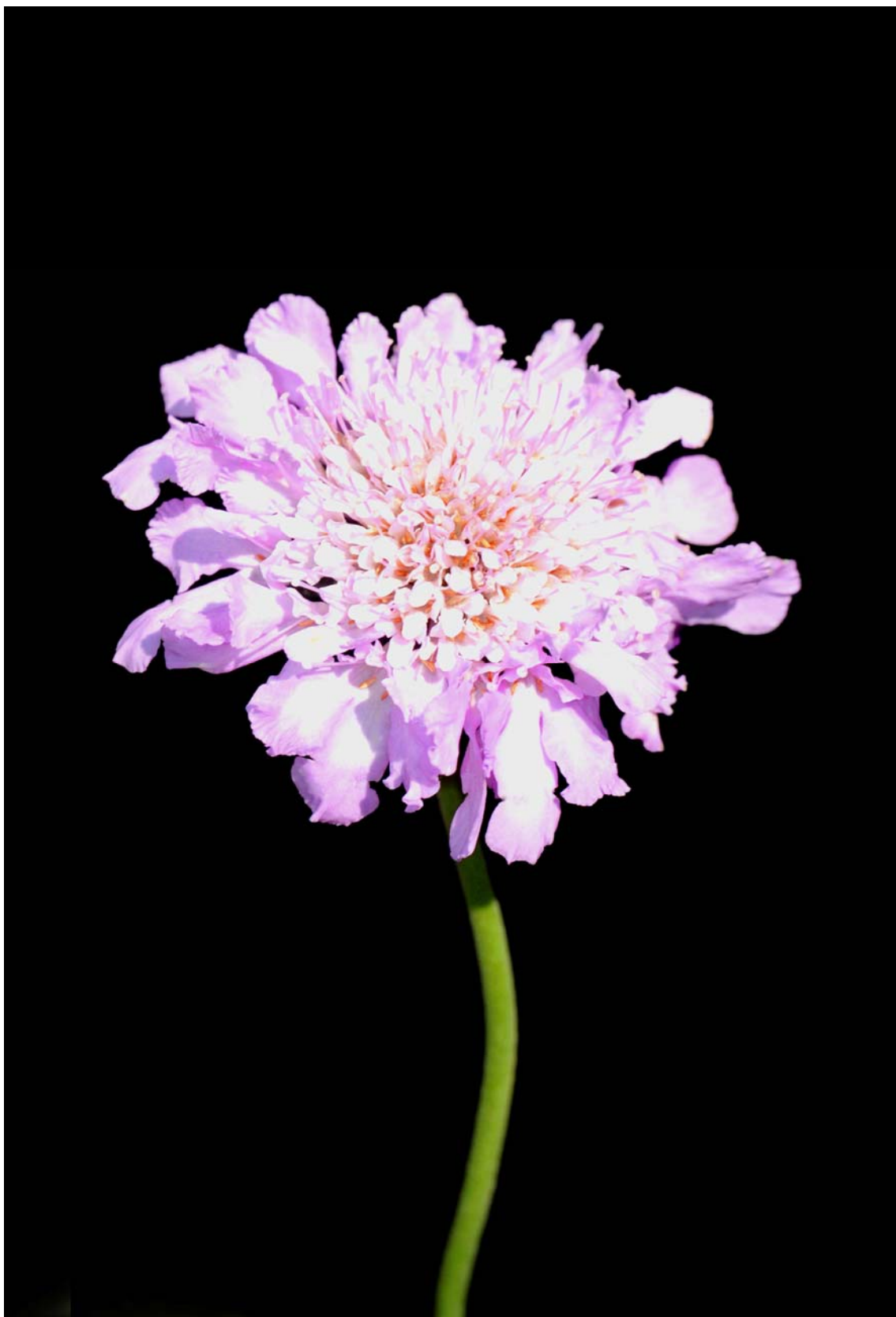
園芸種のマツムシソウには花色の白いもの、濃紫紅色のものなど各種があり、6月頃から初冬まで、ぽつぽつと長い間咲き続ける。鉢で育てるのも比較的簡単で、大した世話をしなくてもよく咲いてくれる。水捌けの良い土に堆肥をたっぷり入れて育てればよく、路地で育てる場合は特に陽当たりの良いところに植えるようにする。花屋さんには余り見られないが、スカビオサとして売られているのをたまに見かける。また種子は注意深く探していると必ず売られているから、これを育ててみるのも面白い。高原にハイキングなどに行ったときに、種子をとってきて蒔いてみるのもよいだろう。この場合は花色は青紫色のみである。



マツムシソウで羽を休めるクジャクチョウ。両者のこうした姿は蓼科高原や、美ヶ原高原、志賀高原、菅平など信州の高原地帯では、よく見られる光景である(長野県美ヶ原)。



園芸種のマツムシソウの花、野生種よりも花卉が密である。



これも園芸種だが、こちらの花はややピンクが強いようだ。



マツムシソウの蕾。これだけでも貴婦人の針刺しをイメージできる(長野県美ヶ原高原)。



マツムシソウの咲き殻、貴婦人の針刺しといわれる所以である(美ヶ原高原)。

[目次に戻る](#)